# 地歴公民(日本史)　立命館大学　全学統一方式（２／２実施）　１／２

## ＜全体分析＞

試験時間　80　分

**解答形式**

全問記述式

**分量・難易（前年比較）**

分量（減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加）

難易（易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化）

大問３題、小問 50 問（記述 33 問、選択 17 問）　記述と選択の割合は２：１で例年とほぼ同じ。

**出題の特徴や昨年との変更点**

本学では時代・分野の出題配分は日程によって流動的である。とりわけ考古学分野からの出題、未見史料問題の有無が各日程を特徴づけることになる。本日程では以下の通りである。

時　代：近代からの出題が 35%程度、次いで古代が 30%程度、近世が 20%程度となり、中世は 5%程度、戦後は 5%程度、原始からの出題は小問１つにとどまった。

分　野：政治が 35%程度、次いで文化が 30%程度、社会経済が 25%程度、外交 10%程度となっている。

## ＜大問分析＞

| 番号 | 出題形式 | 出題分野･テーマ | コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど） | 難易度 |
|---|---|---|---|---|
| Ⅰ | 記述<br>（設問）<br>（空欄補充）<br>選択<br>（用語４択）<br>（文章４択）<br>（図版４択） | 古代・中世<br>政治・文化 | 古代・中世の神祇祭祀<br>D「新猿楽記」・(c)「大津皇子」・(j)「明月記」はやや難だが、本学では注意しておきたい。(d)の「新薬師寺」は難。(f)は「八幡太郎」が源義家のことだと知らないと判断できず、難。(e)・(g)の図版問題については、日頃の文化史学習で図版も確認していたかどうかで差がついたと思われる。 | 標準 |
| Ⅱ | 記述<br>（設問）<br>（空欄補充）<br>選択<br>（用語４択）<br>（文章４択） | 中世・近世<br>政治・社会経済 | 中世後期～近世における都市下層民の排除と包摂（一部史料）<br>用語レベル・出題形式いずれも難度の高い設問が並んだ。(b)「六角堂」・(d)「御土居」はやや難だが、本学では注意したい。(c)は灰吹法が用いられるようになったのが 16 世紀であることから、(f)「日用」は都市に流入した農民が労働者となったものと文脈から、それぞれ判断したい。(g)「月行事」・(l)「町会所」は詳細な事項が問われており、難。(h)・(i)は引用史料を慎重に読解して解答したい。(n)は江戸の町方人口が約 50 万人であることを前提に計算で導く必要があるが、難しい。 | やや難 |
| Ⅲ | 記述<br>（設問）<br>（空欄補充）<br>選択<br>（用語４択） | 近代・戦後<br>総合 | 近代・戦後の女性<br>〔1〕津田梅子　〔2〕伊藤野枝<br>〔3〕市川房枝　〔4〕山口淑子（李香蘭）<br>(b)「米欧回覧実記」・(d)「山川菊栄」・(j)「亀戸事件」はやや難だが、本学では注意したい。(e)「日本女子大学校」は詳細であり、難。(n)「岸信介」は満州総務庁次長・商工大臣を歴任したという点から判断したいが、難しい。(r)「厚生省」は「健民・健兵政策を推進」という箇所から判断したい。 | 標準 |

※難易度は５段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

© 河合塾　2024 年

## ＜学習対策＞

①一部に詳細な知識を問う出題がみられるものの、それに惑わされることなく、基本事項の理解を深めておくこと。
②出題の７割程度が用語記述問題である。正確に歴史用語を書いて覚える学習を心がけること。
③図版問題や地図問題への対策が必要である。教科書や資料集などの写真・グラフ・地図などを積極的に活用して学習する習慣を身につけること。特に考古学分野では遺跡の所在地の都道府県名を覚えるとともに地図でも確認しておきたい。
④史料問題は頻出なので対策を怠らないこと。史料の空欄補充などがよく出題されるので、基本史料は音読するなどしてキーワードを覚えるようにすること。
⑤考古学分野など、同一テーマがくり返し出題される傾向があるので、過去問の対策を怠らないこと。

© 河合塾　2024 年